

4140

特72

124

雨谷一菜庵編
永井鳳樓密畫

少年史
譚
第一編

阿部仲磨

東京民友社發行。



301666-001-5

特72-124

阿部仲磨

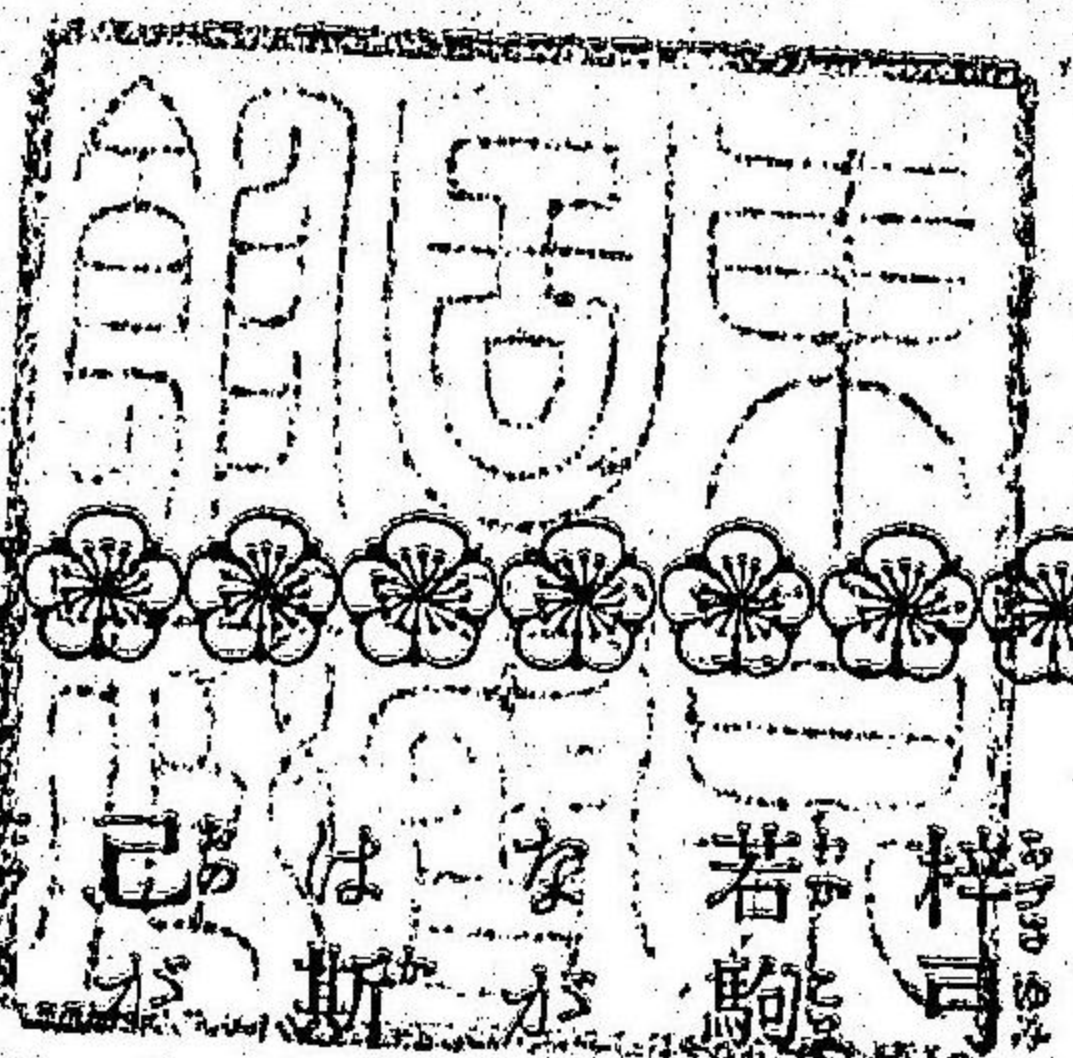
雨谷一菜庵編

M30.2

ACK-0001



特々
124



はしがきにして

梓弓 春とし聞くに心も勇みたちて。若草もゆる野邊の
 若駒 のこと。何とはなく羈はなれし思長閑やかに。鉢
 なが ら窓の梅の香に墨をさへすり流して。土筆も明日
 は斯 くばかりも丈やのぶらんなど。戯れつと筆とるも。
 己が 「我にはゆるせ」てふ僻の一ツなるべしや。
 民の 友てふなつかしき名の社主なる人より。世の人の
 幼き 者のために好き書つくれよ。國の本を養はんと思
 はふ 幼き人に先づ教るにまされる道あるべくもなし。



とて。かにかくとわりなく迫らるる言の葉の。實にと
 思ふ節あれば。何をがな書きつゝりて見よとのすくめ
 黙し難く。友なる中野三鷹子とはかりて。少年史譚拾
 貳篇をば交互に編みものして。世に出さんとは思ひ定
 めながら。わが拙き筆もてそが第壹篇を公にせんは。
 いさくかはづる處なきにしもあらねど。世に瀬踏など
 いふものゝ心になりもて。終にかくなん。

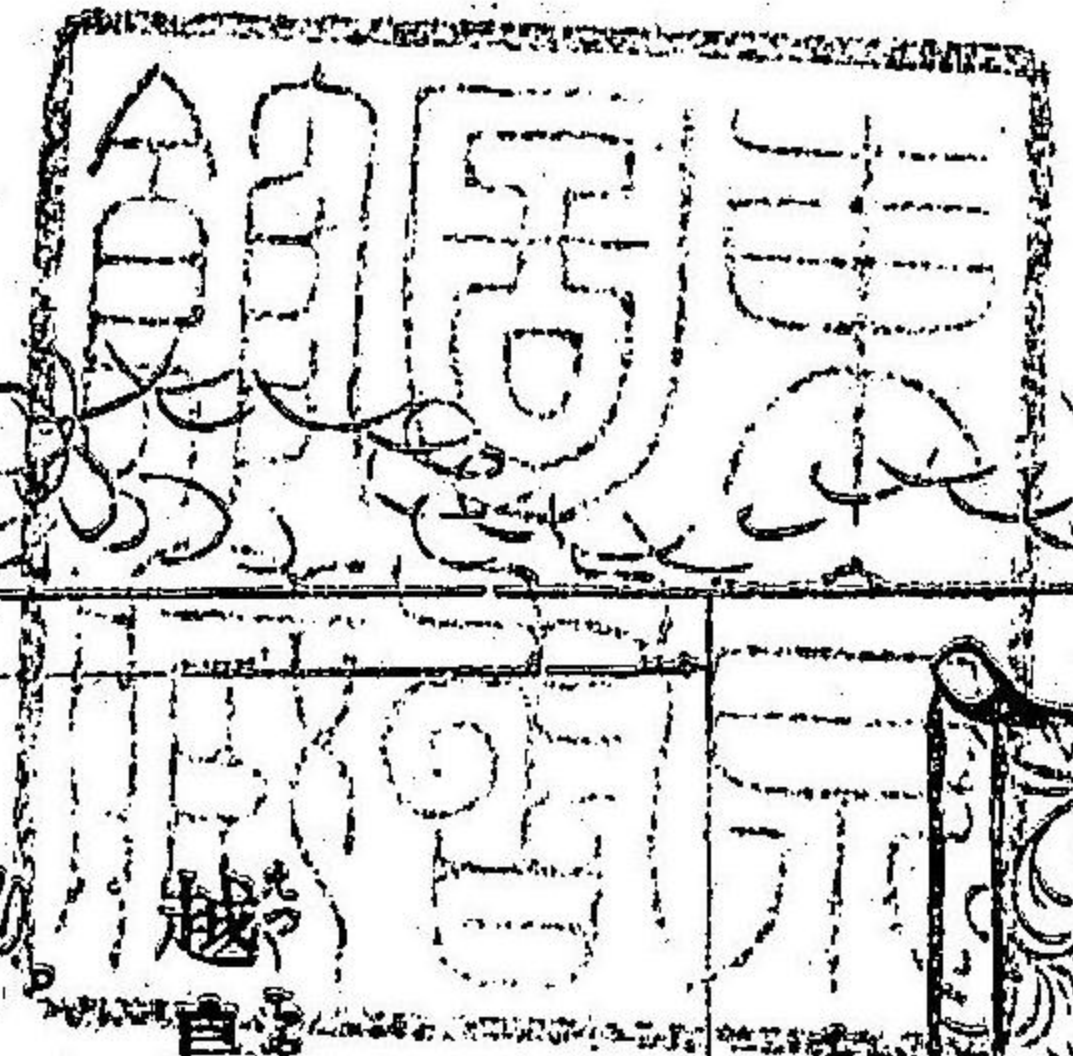
梅見月のはじめ

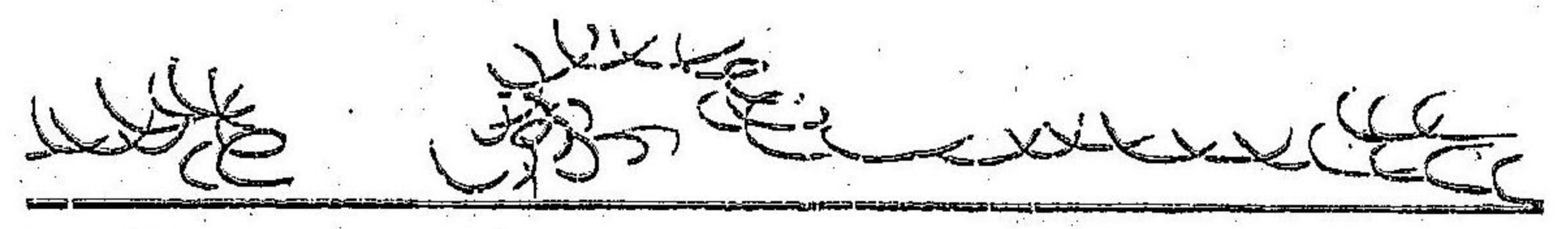
一茶庵主人

雨谷一茶庵編 永井鳳仙密書 阿部仲麿

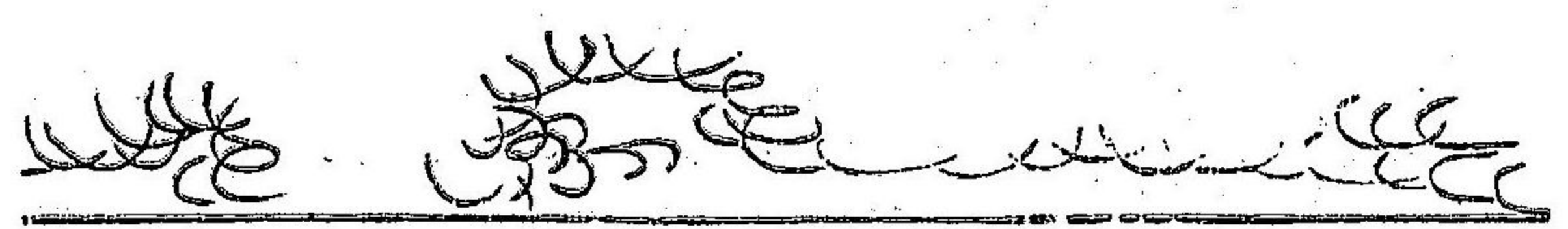
一、仲麿唐に趣く

越鳥は巢を南枝に營み。胡馬は北風に嘶くといふとあ
 これ鳥獸すらも故郷を慕ふの心あるを知るべし。
 ましてや人と生れて心鳥獸にまさりたるからには。い
 かで故郷をば忘れ果つべき。
 元明天皇の御位にましましける時 中務太輔船守とい





へる人の子に。阿部の仲賢といへる才學の人ありけり。
 幼き時より文書き物讀む業をこのみて。世の常の子供
 には似ず。父船守もこれを見て痛く喜び。その好むが
 まくに。和漢の能き文等求め集めて仲賢に與へ。又好
 き師を撰みてこれに習らはしめければ。十歳のころは
 ひには教ゆる人も耻はしき迄に上達し。和歌唐詩をさ
 へ優れて稀あるものを咏出たりといふ。
 去れば其名何時しか世に知られて。雲の上の賢き邊に
 も聞へければ。終に元正天皇の靈龜二年(神武紀元千三
 百七十六年)召し出されて遣唐留學生の一人とはなれり。
 此頃唐には尤も文物の隆盛を極めたるの時にして。我



國よりも遙々彼の國に赴き。禮樂書數天文曆易等な
 くれとなく學び得て歸るもの多し。これを遣唐留學生
 と名づけて。多くの人の内にも殊に秀でたる者なら
 ば。この譽をうくる事難かりしなり。
 仲賢は船路も穩に唐に入りて。先づ彼の國の帝に謁し。
 我帝より贈る所の珍らしき品々を捧げけるに。帝なく
 めならず打喜はせ給へて。「遙けき浪路よくぞまら
 たる。又日本の帝より贈り賜りたる品々。いづれ珍ら
 しく尊からざるものもなし。これ傳へて我家の寶たる
 べし。又汝が年若くして故郷を天涯に棄て。道を我國
 に學ばんとて來れる志天晴なり。我が力の及ぶ限りは



勉めて等閑なる事はあるまじ』との詔あり。仲啓かしこみて其恩を謝し奉るに。帝重ねて『今日日本の帝は如何にして世を治め民を撫で給ふや。』と

風仙圖



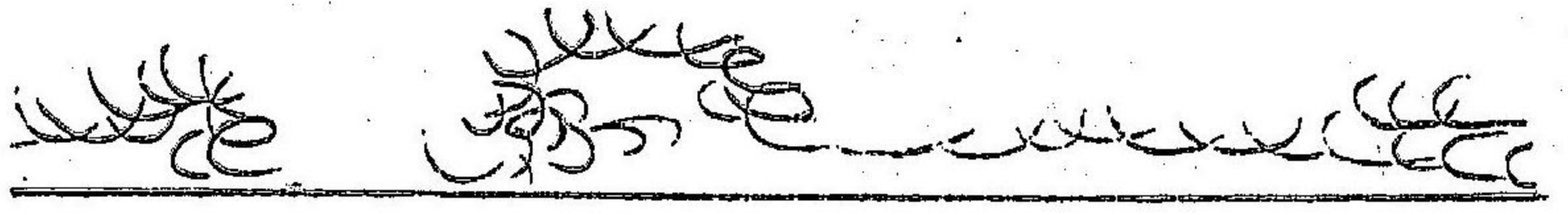
問はせ給ふ。仲啓つとしまて『我國の帝國民を治め給ふこと慈母の赤子に於けるが如く。仁義を旨として刑戮を慎み給ふ。故に萬民徳化を仰ぐと草木の風に靡くが如く。門戸閉す事なけれども盗人襲ふとなく。道落ちたるを拾はず。往くに道を譲り。隣を親ふして相保くると海内一家の如し。民富み國榮ゆて。到る處に太平を歌へども。帝は猶心を安じ給はず。寒夜に御衣脱

がせられて。貧しき民の疾苦を憐み。供御の厚味をさ
け給ひては。飢乏たる民の窮迫を察し給ふ。天變地妖
皆罪を龍躰に歸し。常に寢食を安じ給はず。これを以
て人倫五常の道正しく。兵馬の災絶であることなし。』と
答奏し奉れば。帝また問ひたまはく。『左様の國よりし
て。遙々と道を我國に學ぶは何故ぞ』仲啓拜謝して曰
く。『當國は文物遙に我國に優れて。碩學博識の名儒林
の如く叢る。これ臣が命を奉じて萬里波濤を踰ゆる所
以なり』と。當時の唐帝をば玄宗皇帝と申し奉りき。
玄宗皇帝儒臣を召して仲啓の學才を試むるに。一とし
て凝滯する事なく。疑を決つし難を啓くと竹を割るが

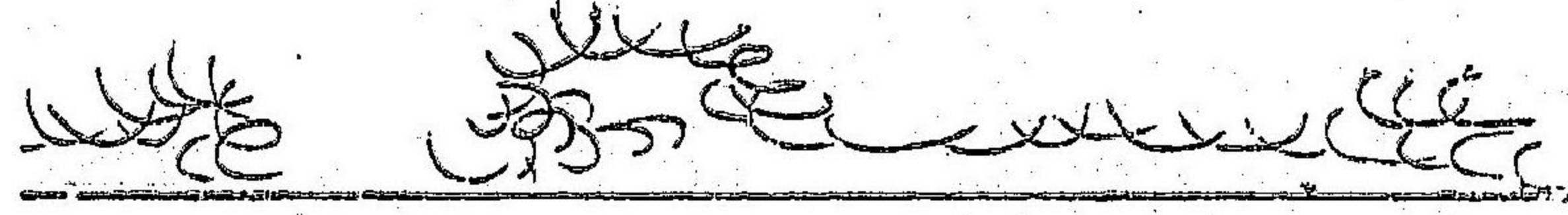
如し。帝感歎ありて名を朝衡と賜へ。左補闕の官を授
け。儀王の傅としてこれに侍かしむ。恩遇未曾有の事
なれば。仲啓も常に志を盡し。勉めて聖意に報ひ奉ら
んとのみ思を碎さけり。去れば程なくして左補闕より
一躍して秘書監に至り。盛名朝野に聞ゆ。名流の士來
つて其交に預らん事を乞ふ者多し。

一一、仲磨唐玄宗に仕ふ

然るに此時に當り。天下泰平打續き府庫又富たりけれ
ば。帝の御心やと驕り給ひ。楊家の娘を召して後宮に
入れられてよりは。寵幸世に類なく。宴遊歡樂日を以



て夜につぎ。春の日の花の下に夜を迎ふことの速なるを啣ち。秋の夜の月の臺に。雞鳴の曉を告げなん事を憂ひて。比翼連理の御情淺からず。これなん世に隠れなき美人として傳へらるゝ楊貴妃なり。貴妃は六宮の粉黛顔色なしと傳へらるゝ程の傾國なりければ。流石に賢こき御性質にてまします帝も。御心終に迷はせ給へ。貴妃の望む所としいへば。是非の御辨もなく。只管に其心を喜ばせんとのみしたまへければ。國政やと亂れて國財やうやく空しく。心ある人々眉をひそめて。密に憂を懐かざるものもなかりき。楊家はもとより楊家に所縁の者のみ。恩惠を蒙るゝ淺からず。時を



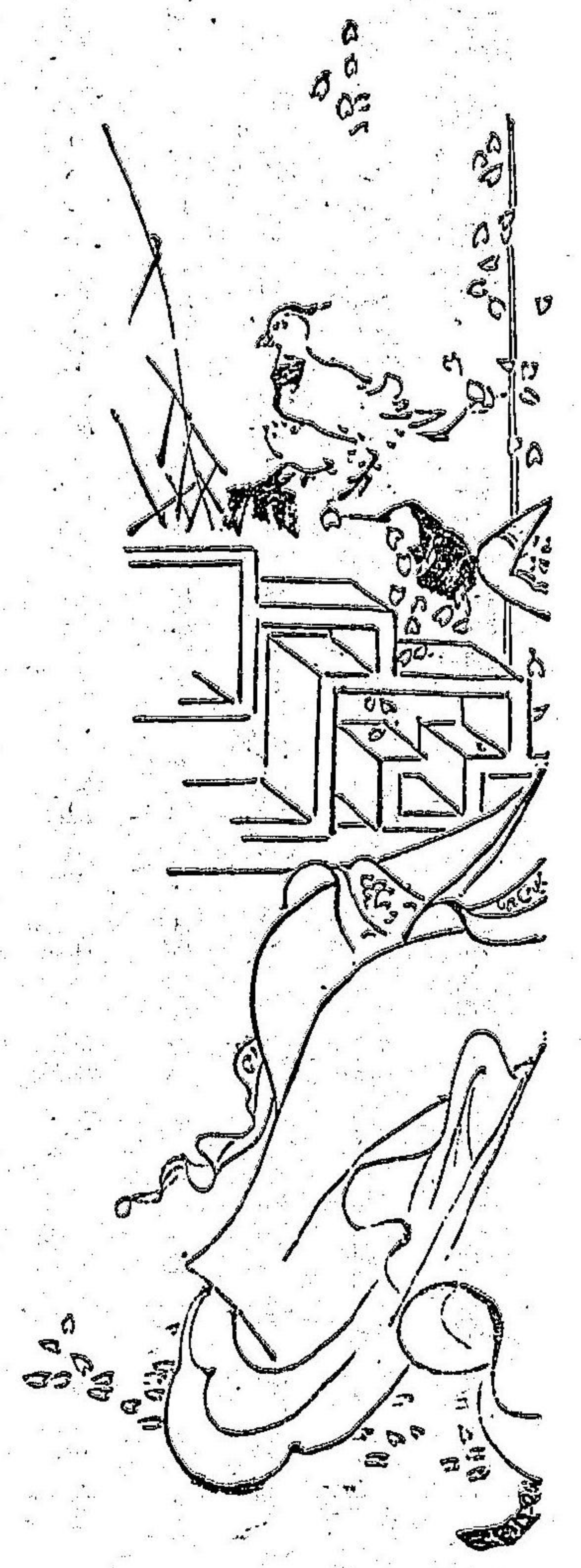
得顔なるが羨しく。心いやしく媚をうる輩は。彼方此方に傳手を求めて。其門に出入するの榮を擔はんとし。小人朝に進み廉潔忠誠の士。空く涙を呑んで草莽に隠るゝと。我朝に於ける平家の世盛と異なる事なかりき。彼に楊國忠あり。我に平清盛あり。仲賢これを見て痛く心をなやまし。吾れ素より天外の羈客たりといへども。聖恩に浴するもの尋常にあらず。今豈に國家の傾廢を坐視するに忍びんや。と或日面を犯し檻を折て諫て曰く。臣今遠く日本を去つて天外の一孤客のみ。然も星霜を重ねるもの卅餘年。これ單に聖恩の優渥なるあるに頼つてなり。今臣陛下の爲に謀



るに。死を以てするといへども猶且つ其萬分一を報ず
 るに足らず。若し臣をして利祿の望あらしめば。臣敢
 て言はざるなり。臣をし爵位の尊からんを求めしめば。
 黙して陛下の意に追
 従せんのみ。今臣妻
 子あるなく。以て後



日の營を憂へず。況んや爵位の如きに於けるをや。
 災墻壁の内にとありと古人誠る處あり。尤も恐るべきも
 のは。外來の敵にあらずして。却つて墻壁の間に養は
 ると敵にあり。陛下今や常に後宮にあつて宴樂を事と
 し給へ。朝政をたも聞くを怠り給ふ。且つ一婦の喃やく





をどつて天下の公法を破り。忠士の諤々を捨てて國用の日に空しさを顧み給はず。天下終に陛下を怨み奉つて。人心離反せん。若し果して胡虜邊境に迫り。不臣の賊亂をなすの日に際せんか。陛下は誰によつて以てこれを討伐平定し給はんとするか。獨り此際に臨みて陛下の意を安んずるもの。陛下の民あるのみ。陛下幸に深くこれを慮へ。と且つ泣き且つ諫む。誠意面に溢る。帝は靜にこれを慰め。『今子が説く處のもの。皆寡人が過なり。寡人これを悔ゆ。』と。後果して大亂あり。既にして我孝謙天皇の天平勝賢中。遣唐正使として藤原朝臣清河。これが副使として吉備の眞備等唐に入る。

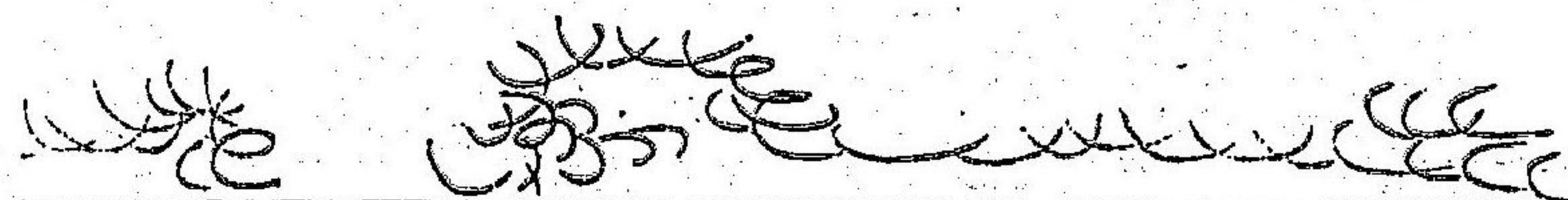


噫當時此等の人々に接して。仲磨果して如何の感ありしぞ。

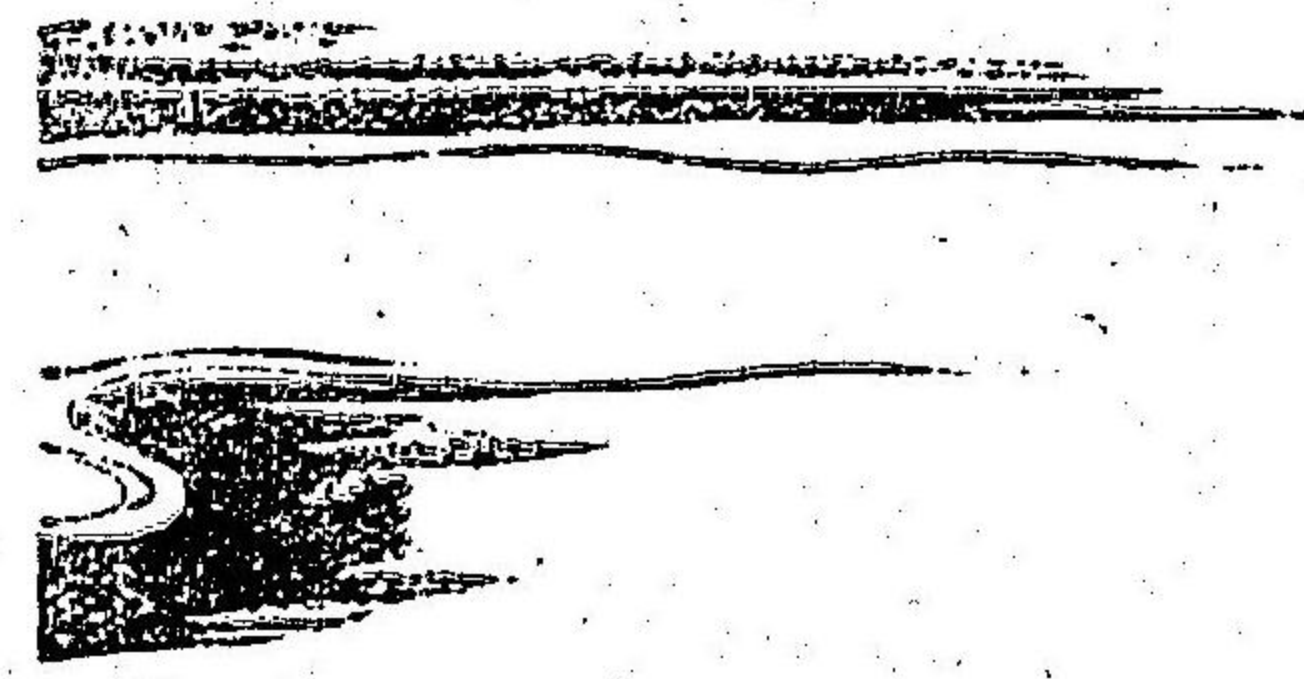
三、仲磨歸朝せんすとす。

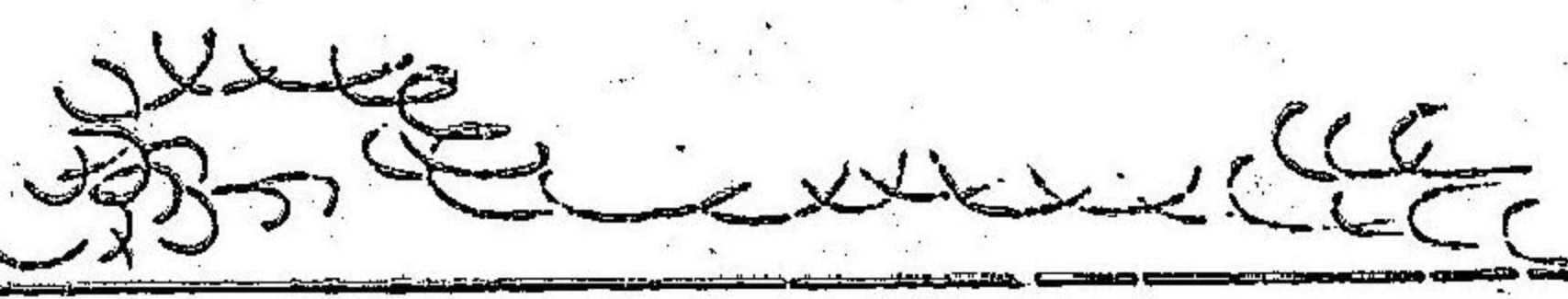
春の旦に紅白花は嬋娟たる粧を凝らせども。故郷の空を仰ぎ見て。歸雁の翅なきを悲み。夏の夕に團々月は玲瓏たる光涼しけれども。杜鵑啼血の思絶ゆることなし。秋來つて紅葉霜に飽き。蘭の秀たる菊の香たる賞づ可らざるに非ずといへども。孤猿夜叫びて客思徒に驚き。冬將に老ひて六花靡々として亂れ。詩趣更に豊ならざるに非れども。歲月匆忙として羈情轉た愁ふ。





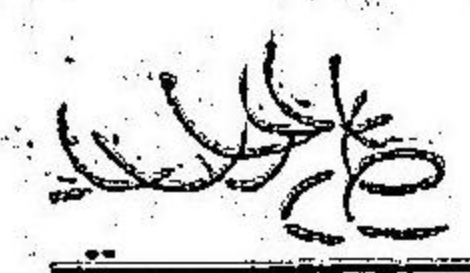
流石に日出る方を望み見て。故郷を戀ふ涙の露。袖も
 何時しか色褪せて。冠纓もくちなん折。日本よりして
 清河をはじめ。多くの人々來朝すと聞きたる時は仲磨
 の。心もさこそ躍りけん。
 待つ程もなく正使として。中衛
 大將藤原房前の四男正四位下參
 議藤原清河。以下の人々無事長
 安に着
 したり
 ける。
 玄宗皇





帝日を定めて謁見をゆるし給ふに。清河謹んで豫て携
 ふる所の寶物を獻じ。聖壽の長久無量を祝す。帝大に
 其禮儀の厚さを喜び。『日本は聞さしにも勝れる君子の
 國たり。今より禮儀君子國と敬稱べし』との詔あり。
 先づ仲實に命じてこれに接伴せしめ。府庫並に三教殿
 をも巡覽せしむ。且つ畫工を召して。清河及吉備眞備
 が像を畫しめ之を蕃藏中(寶庫)に收む。
 玄宗皇帝より使臣に賜ふの詩あり。曰く

日下非殊俗。天中嘉會朝。念余懷義遠。
 衿爾畏途遙。漲海寬秋月。歸帆駛夕颺。
 因驚彼君子。王化遠照々。



其歸るに臨みて玄宗厚く使臣に賜ふ所あり。殊に名玉
 黄金羅綾等をとつて。之を使臣に托し。日本皇帝に獻
 ぜしめ。鴻臚卿將桃旒をして。これを送つて楊州に至
 らしむ。

仲實はさらでも故郷なづかしき折なれば。如何にもし
 て清河等と共に歸らんと願ひて止まず。玄宗其志の切
 なるを憐みこれをゆるす。仲實は今ゆるされて故郷に
 かへること嬉しからぬにあらねども。又立返り思入れ
 ば。聖主日頃の朝恩を。捨てて行衛を白雲の。彼方の
 空に隔つるのみか。年久しくも睦みてし。友に別れて
 かへる波。打も絶なん通路の。未越方と恩愛の絆に心



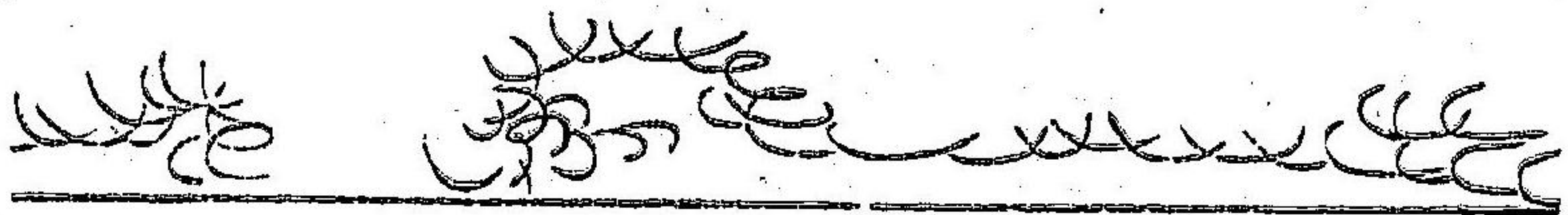
たふならず。涙ととも一詩を賦し。これを皇帝に奉
る。詩に曰はく(但し仲曆歸國を乞ふにより。玄宗これ
を唐より改めて派遣の使者とはなせるなりき。)

衛命將辭國。非才忝待臣。天中戀明主。
海外憶慈親。伏奏違金闕。駢驂去玉津。
蓬萊鄉路遠。若木故園隣。西望憶恩日。
東歸感義辰。平生一寶劍。留贈結交人。
となり。又友として親しみ深かりし。尙書右丞王維及
包佶。趙驛の人々。詩或は序をつくりて仲曆を送る。
今王維の詩をかゝく。

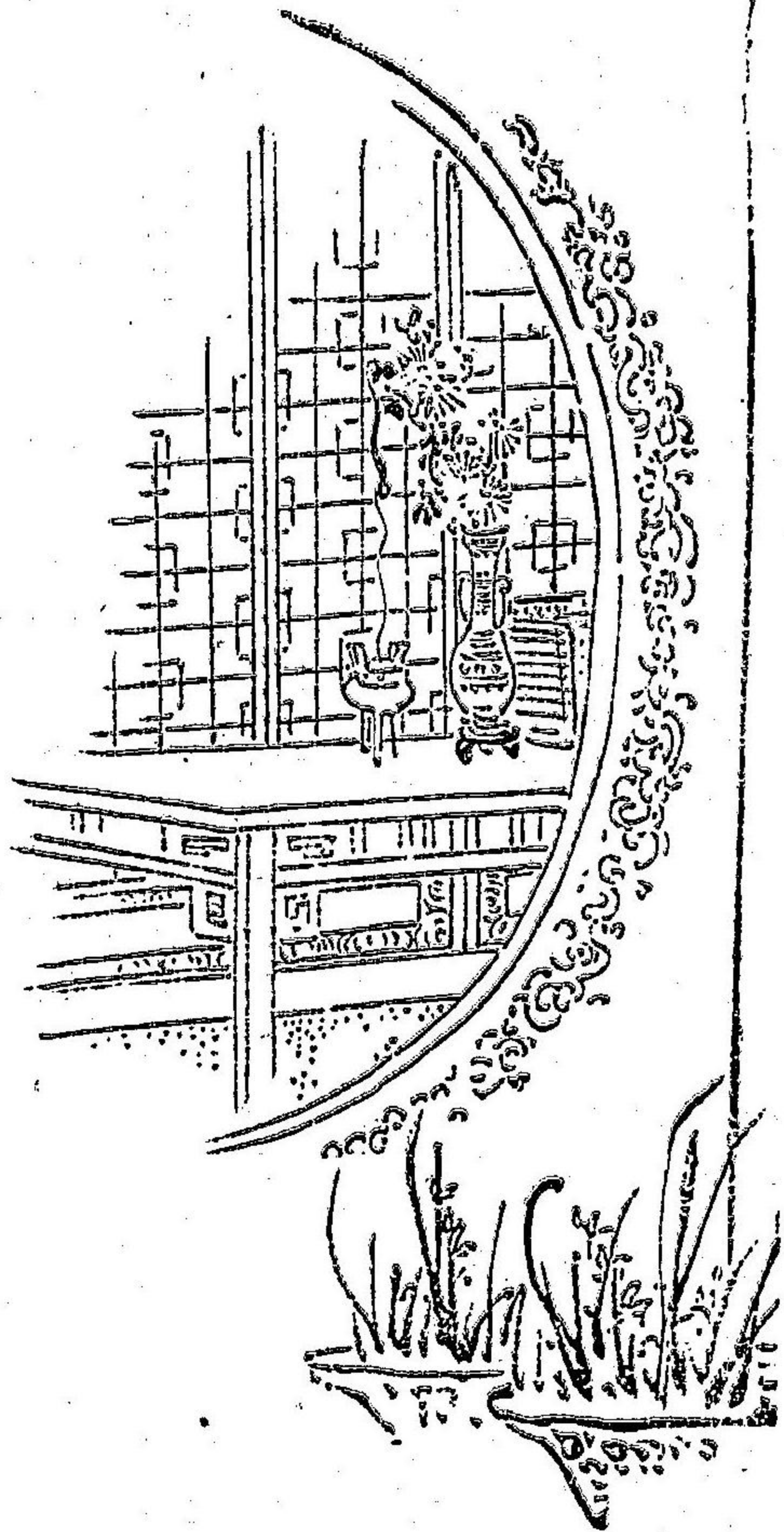
送秘書晁監還日本

王維

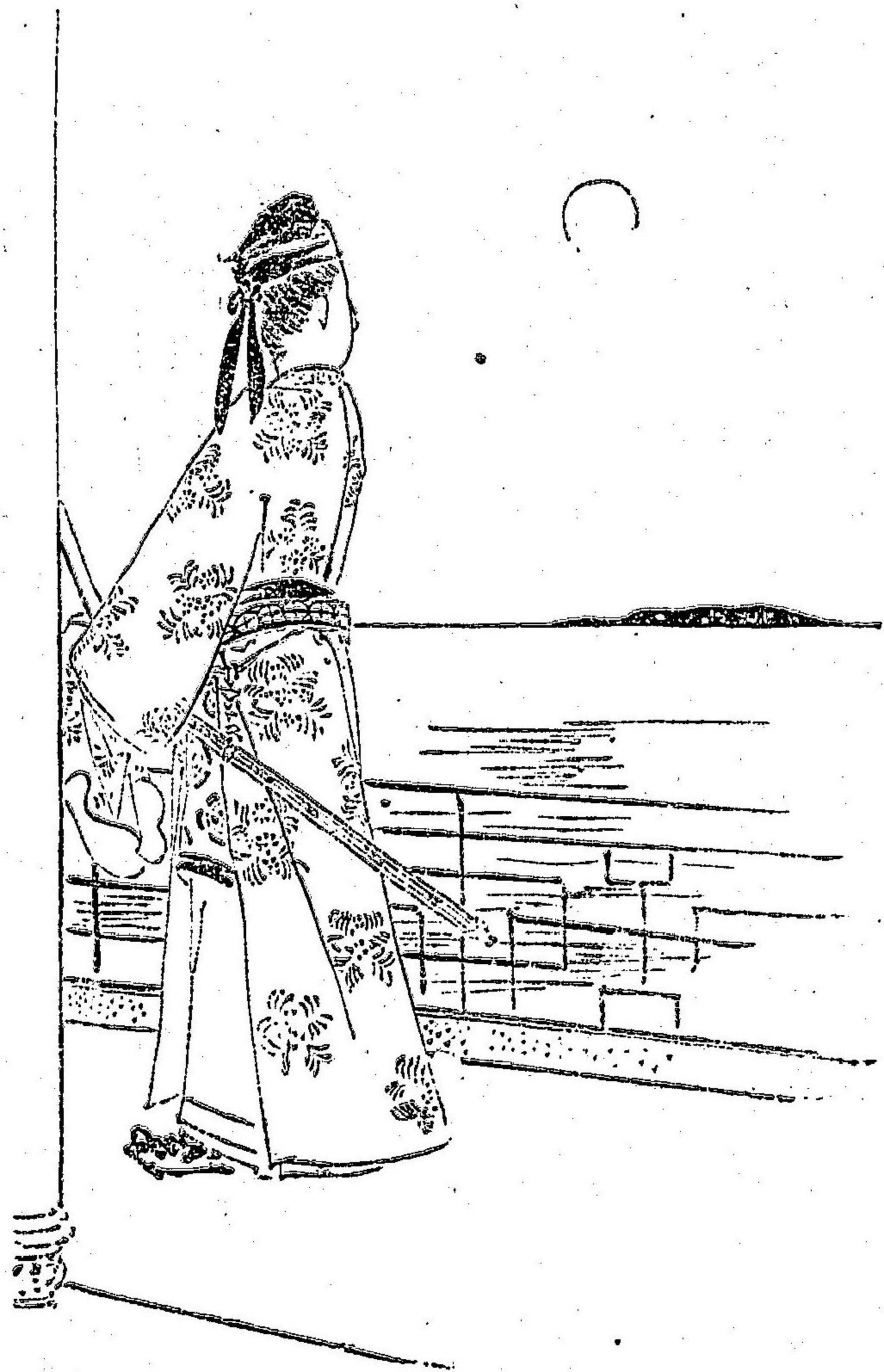
積水不可拯。安知滄海東。九州何處遠。
萬里若乘空。向國惟看日。歸帆但信風。
鰲身映天黑。魚眼射波紅。鄉國扶桑外。
主人孤島中。別離方異域。音信若爲通。
と。これ等の人も皆別を惜みて。仲曆を送り明州に
至る。
時正に仲秋。天澄み氣清し。樓に倚り江に臨んで。吟
嘯盃を上ぐれば。涼氣坐に滿て。主客陶然たり。糝糊
たる前山忽ちにして玉兔を吐けば。清光團々として。
青松白砂明かに辨すべし。誰が弄ぶ音にやあるらん。
笛聲曉々として江を渡つて來り。何の邊の寺に撞らん。



雁の影あり。孤雁落るの彼方に漁火明滅たり。
 仲鷹衆と共に興に乗して樓を下り。前汀紅葉林下に立
 てば。菱花愈々白ふして。枯荻残荷一葦の舟をつなぐ。



鐘響洪々として餘音天の一方に消ゆ。消ゆゆく方に孤



其前山の景日本の三笠山に似たればとて、仲磨一首の和歌を詠じ、これを漢譯して王維等に示す。衆感歎して等しく衣を潤ふす。歌に曰く。

天の原ふりさけ見ればかすかなる

三笠の山にいせし月かも

誰か此歌を讀み此歌の心を解するもの。一掬同情の涙にむせばざるべき。定家撰百人一首にのせられて。世の人能く知る所なり。

四、海上風波悪しく仲磨安南に漂泊す。

斯くて仲磨は親しき友に袂を分ちて。清河等と共に船路遙に日本へと志し。終に纜を解きたりしが。二日路計りは風もなきて。波少もさわがす。海上席を敷き連ねたるが如くにして。眞帆片帆は朝日の影を孕みて船走る事矢の如く。白鷗衛鳥は夕の風に翅を翻して。飛こと意あつて舞ふが如し。舟師は素より船中の人々に。心地よく酒くみ交はし居たりけるに。船は次第に東をさして。追風なれば隻時が程にも十里廿里を走り見渡す限り漫々たる沖へどこそは進みたれ。島もかくれ山も何時しか見へずなりて。青海原の月白く。今宵の景色もめづらしなむ。舟師の一人がいふ

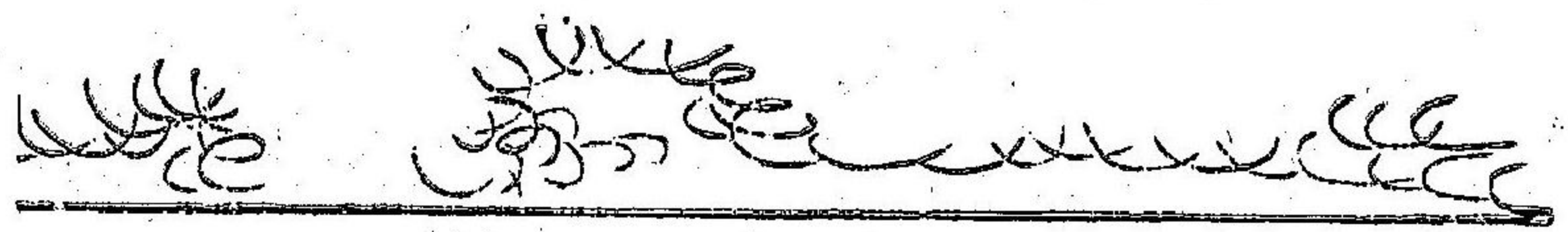


水や 空や 空や 水な
 る邊より 小山
 の如き黒雲
 湧出で。ア
 レヨと叫ぶ
 程もあらせ
 ず。ドツと



を聞きて。仲賢
 と清河とは共に
 詩韻を分たんと。
 袂をつらねて舷
 頭に立出で。彼
 方此方を見廻す
 折し
 も。
 西の
 はて
 なる





吹立つ風につれて。一天俄に墨を流し。月の光もあら
 はこそ。波は次第に荒れまさりて。舟胴を打つ聲雷の
 如く。見上ぐる如く捲上げて又打おろす勢は。身の毛
 も粟立計りなりし。
 風あれ濤高く。夜は暗黒となりはてく。更に咫尺も見
 るに難し。舟は木の葉の浮く如く。彼方此方にゆり立
 てられ。雨さへ果ては加はりて櫓折られ梶は流され。
 今は人々死を待つより外に手段も荒波の。打ち來る音
 に膽を消し。只神佛を祈るのみ。眞備等が乗りし一艘
 は何時沈みしか流されしか。更に行衛も知れざりけり。
 仲磨は一日たにも千秋の。思先づはす故郷の土とはな



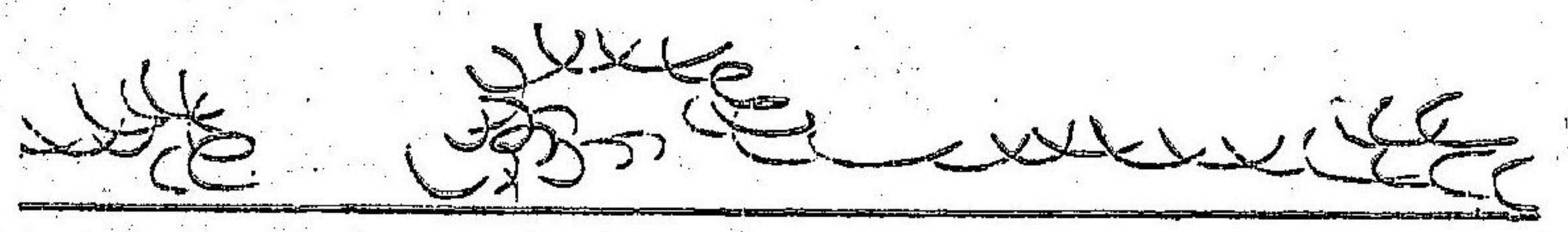
らず。今茲に魚腹を肥す身となるかと。涙ながらに打
 伏して口惜泣こそ憫なる。
 去れど雨風靜まらず。波は打上け打下し。何處とはな
 くゆられつく。船に行衛も無かりけり。
 * * * * *
 神の冥助か佛の加護か。波も次第に靜りて。船は何處
 と知る由なき。島の汀に打寄せられ。茫然と立つもあ
 り。欣然として喜ぶもあり。程なく雲もれさまりて。
 朝日東天に輝けば。日本は彼方と伏拜み涙にむせぶ人
 もあり。



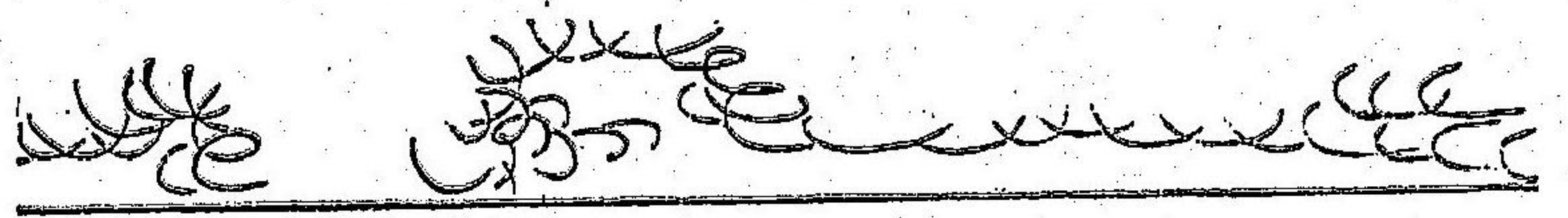
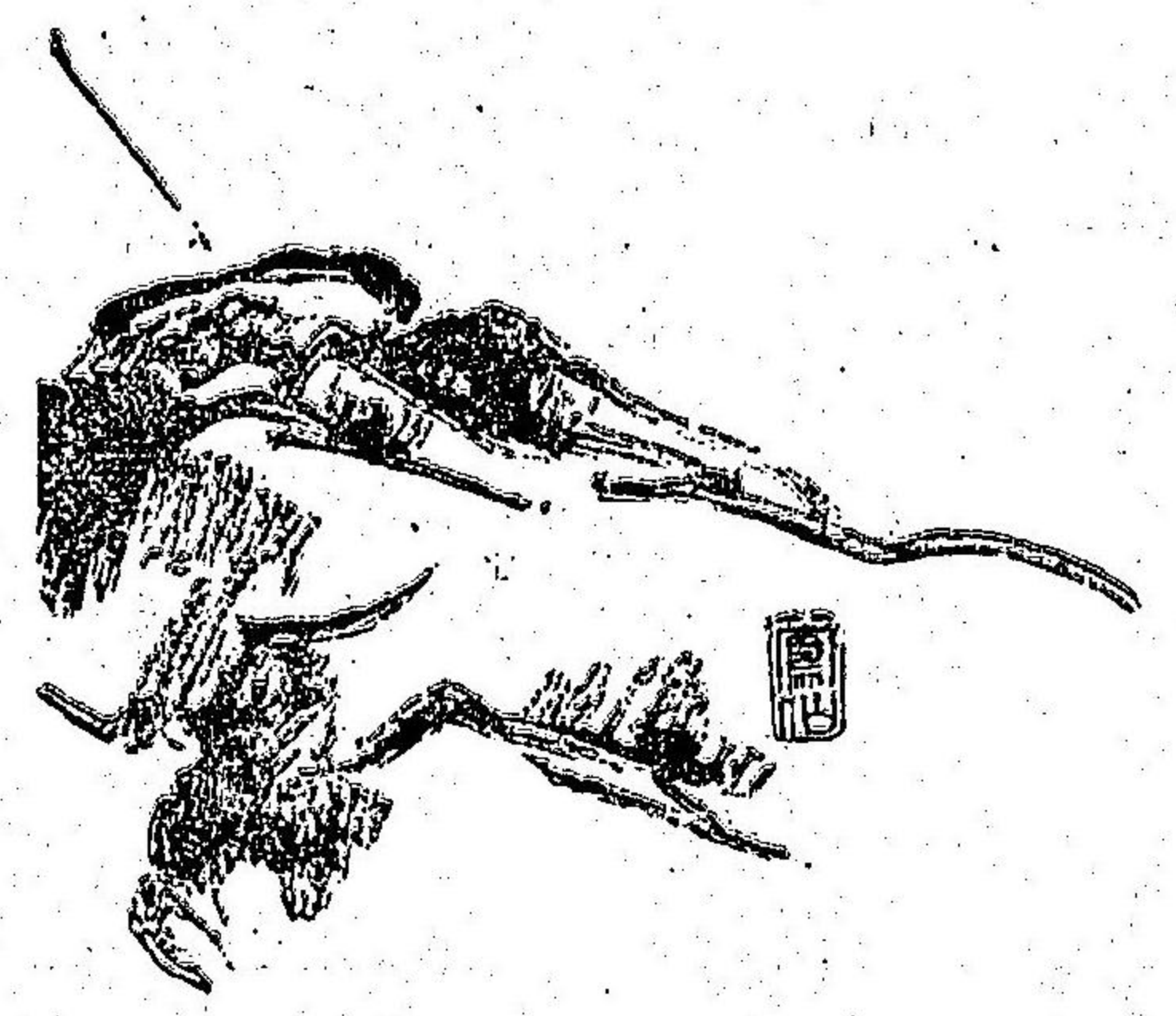
髮は蓬と振亂し。黒き肌くろに衣いも掩おほはず。鬼おににも似にたりし荒男あらい。五人十人打集うちある。互たがひに罵ののり騒さわげども。詞ことばは少しも通とずることなし。其内そのうち老おひたる一人あり。僅わずかに唐たう語ごを知りしかば。やうやくにして此所このところはこれ。安南あんなんの國くにの所屬しよじゆくなる。名なもなき島しまと聞きくからに。數時いくばくは呆あはれ居ゐたりしが。斯かくてあるべき事ことならねば。やうやくにして食けを求め。茲こゝに一日いちにち疲つかをやすめ。安南あんなんの國くにへ打渡うちわたりり。再唐さいたうに入いらんとて。驩州わんしゅうにこそつきたりける。

五、士民一行を襲ふて一行死する者多し。

前漢ぜんかんに蘇武そぶといへる人ありき。字なづをば子卿しきやうと呼びて。杜陵とらうの人と傳つたへける。忠義ちゆぎをもつて心とし。節操せつそうを守つてうつらざる。茲こゝに一ひとの佳話けいごあり。時ときの帝ていをば武帝むていと申し奉たてまつりしが。蘇武そぶに中郎將ちゆうらうしやうの官くわんをさづけ。節せつこれは遠とほく使つかする時ときなき。帝ていよりの使つかなるに紛まれなき徵しるしとして。帝ていより賜たまはるものなりなりをもちて匈奴こつとといへる夷いの國くにに使つかせしむ。其國そのくにの王わうをば單于たんよとよなん呼よびけるが。單于たんよ蘇武そぶを見みて心こゝろに思おもふやう。我われれ多くの臣しんをば持もちたれども。未いまたこの人ひとの如ごとく文武ぶんぶ共に優すぐれたるものあることなし。今如何いまいかにもしてこれを説とき。臣下しんかの一人ひとりとなすべしと。よつて蘇武そぶをとめ



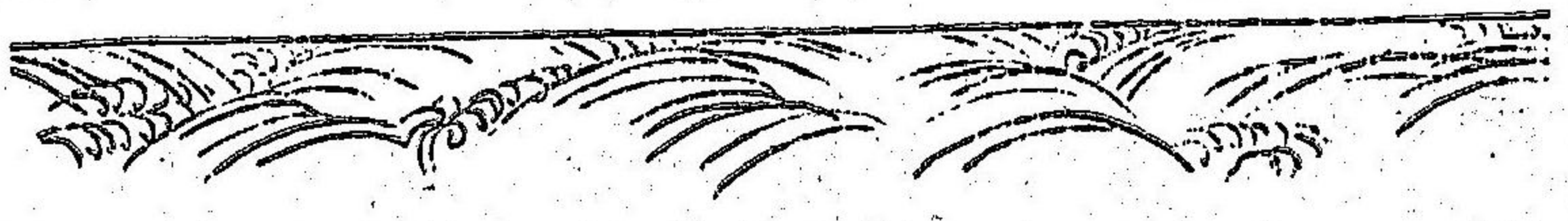
て様々に説きすかすとはいへども。蘇武は少しもこれに従はず。單于今は先づこれを苦しめて。其志を挫かんと思ひければ。野外風寒き所に崖により一ツの大窖ありしを幸。蘇武を其内に押込めて。少しも飲食を與ふる事なし。時に北地の習なれば。雪は靡々降り積りて。窖の外にも満たれば。蘇武よろこびてこれを噛み僅に咽喉を潤ふし。又山薯蕷の根を掘り起し。野鼠をとりては食ひ。元氣少しも衰へず。單于これ



をあやしみて。更に蘇武をば人住まぬ北海遙かの島にうつし。此所に羊を牧せしむ。蘇武拒むに由なくして。北海はなれし島國に一人虐くも棄られつ。更に節をば放すことなく。涙に其目を送りけり。衣は破れて肉もやせ髪と髯とはのぶるにまかせ。



沐浴



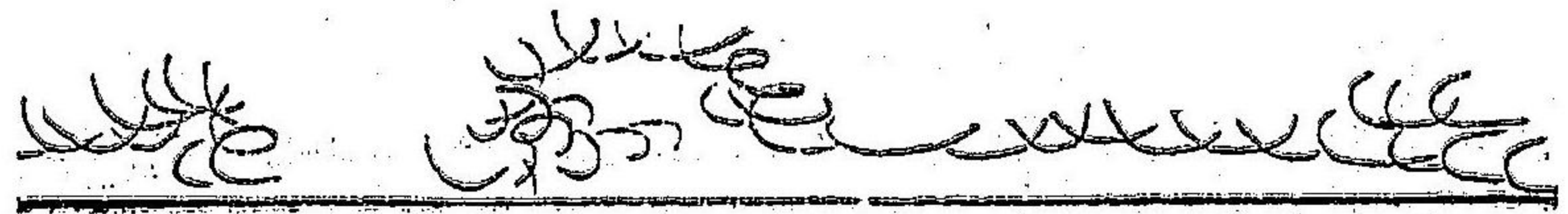
三十二
するとあらざれば。肌はだに悪あしき腫物しゅぶつを發はし。野路のろの清きよ水みづにうつす影かげ。吾われから吾われにはあるまじと思おもひ疑うたがふ程ほどなりける。

漢かんの武帝てい崩御ほうごましまし。昭帝しょうてい御位みゐを次つぎ給たまひてけるに。昭帝しょうてい使しを單于だんごに遣つかし。匈奴こうこと和親わしんの御誓約みちかひあり。其序そのついでを以もつて蘇武そぶを請こひうけ召連めいれんかへらしめんとせしに。單于だんごは猶なほも偽いつはりりて。蘇武そぶは死しせりと答こたへたり。此時このとき匈奴こうこに常惠じょうゑいといへるものあり。常つねに蘇武そぶが志こころをあわれみ。如何いかにもして彼かれを救すくはんと思おもを碎くだける折せなれば。或夜あるよ密ひそかに漢使かんしを見て。單于だんごが答こたふる處ところ全くは偽いつはりにて候まちなり。蘇武そぶ今猶いまなほ生いきて北海ほくかいにあり。常つねに節せつを抱かかりて志こころを

まけず。羊ひつぎを牧ぼくして朝夕あさゆふ故國ここくを憶おもふの様よう。吾われれ見るに忍しのみずして斯かくは告つげまるらするなり。故ゆゑに今蘇武いまそぶを救すくひ得えて歸かへり給たまはんとらば。單于だんごを見てかくくくと申まさせ給たまへ。然しかる時は單于だんごも又欺あざむくを能あたはずして蘇武そぶをかへし申ますべし。と詳つかに手段てんぐを教おしへければ。漢使かんし使手しでをうつて打喜うちよろこび。「かくるべしと思おもひ至いたらず候まちへたれ。御詞みことばにまかせ明日あしたは單于だんごを見て。先まづその如ごとくはからひ申ますべし」とて。漢使かんしは常惠じょうゑいに物ものを贈たまり。厚あつく其情義そのじやうぎを謝あやし。其夜そのよの明あくるを待まちわびたり。早はやや其翌日あしたともなれば。漢使かんしは更さらに寶物たからもの數多あまたを用意もちして。單于だんごの宮殿みやだんに伺候しごうしけるに。單于だんごは漢使かんしのいとも



懣懣なるを喜び。殊に華美をつくしたる客殿にこれを
 ひき。酒よ肴よとさまぐのもてなむあり。數ある美
 姫に酌を命じて打くつろぎたる様を見すまし。漢使つ
 くしみて單于に申して曰く。「既に死せりと御意あるを。
 重てかく申さんは如何なれど。蘇武死せりと全くの
 御戲と思へば。重ねて乞ひまらするなり。此度若し
 大王と和親の約なれりといへども。蘇武を伴ひかへら
 ずんば。漢帝いかでか臣が詞を誠とせんや。只々蘇武
 を賜るべし」と穴勝にのぞみけるを。單于は聞きてカ
 ラくと打笑ひ。「蘇武死せりとあるを戲とは何故ぞ。
 吾れ何とて卿を欺かんや」といふ。漢使頭を左右に打

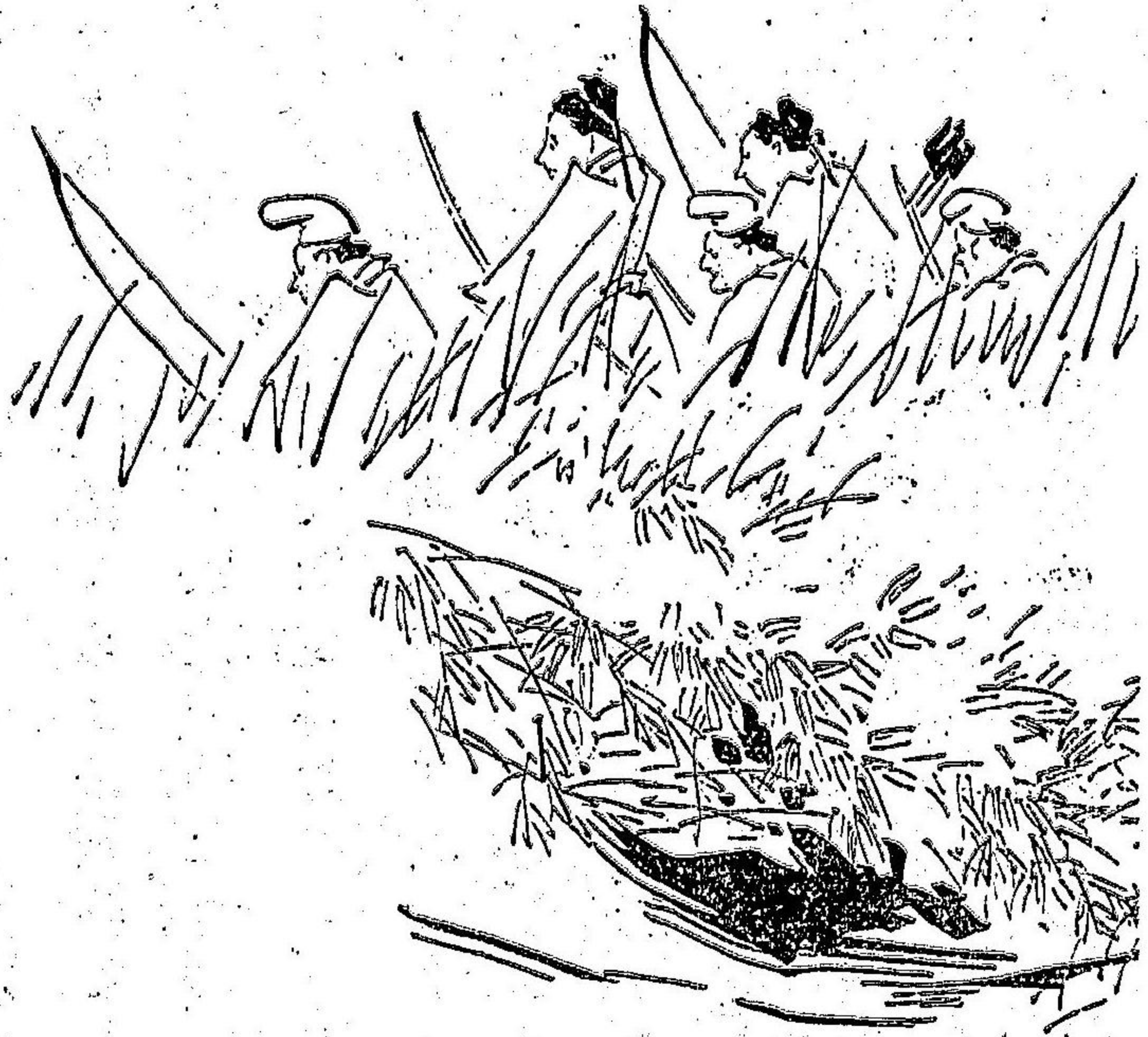


振りて。否とよ其故はかやうにて候なり。此頃漢帝上
 林と申す處に獵し給へ。一羽の雁を射落とし給ひけるが。
 不思議にも其雁の足を見て候へば。何とはなく結びつ
 けたるものあり。取りてこれを見るに一の帛書なり。
 文に曰く「蘇武北海の澤中にあり」と。帝これによつて蘇
 武猶は生くるを知り給ふなり。今は管速に蘇武をかへ
 し給ふべし。仁慈これに過たるとあるべからず」と迫
 る。單于今は欺くに由なくして。蘇武をば漢使に賜へ
 ければ。蘇武は故郷を去りてより。十有九年の雪霜に。
 安き夢さへ結はずして。涙に月日を送りけるが。盲龜
 も終に浮木を得て。今や故山に歸るを得つ。其喜や如



巻 第 一

ふ 根 憐 同 仲 幸 清 等 井
の 心 は じ 磨 同 じ 幸 清 等 井



四十一



巻 第 二

何 夫 少 異 故 慕
な べ き は れ 異 郷 慕



四十二

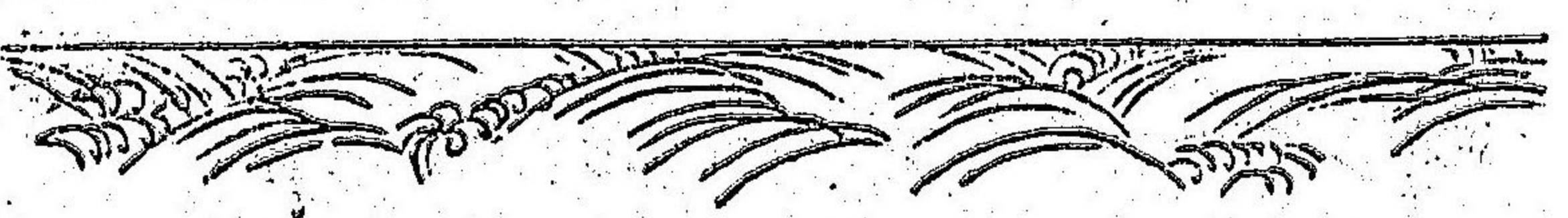




返るの折ありながら。風と波とにさまたけられ。思はぬ異郷にさすらふ。人為ならぬは是非もなし。却説仲磨は清河等と共に。安南の國に打渡り。再び唐に入らんとし。驩州までは進みけるが。前途に臨みて大河あり。渡らんとするに舟あるをなし。人々顔を見合はせて。如何はせんと立つ折から。ドツと揚げたる人聲あり。人々アチヤと見廻す處へ。森の彼方。川邊の葦間。數十人の土民等は。手に手に獲物振鬨し。此方を望みて走せ來れり。扱ては我等を襲はんと豫て待り居たるなるべし。猛しとも何程の事やあらん。我日の本の武術の手練思知らせてくれんすもの。方々



おくれ給ふなど。仲磨劍を抜放ち真先に進みいで。眼を怒らしハツタと睨み。寄らは斬らんと身構ひたり。去れど土民は多勢を頼み。更にひるみし様子もなく。無二無三に打かくれり。仲磨はじめ其他の人々。今は命を惜まほこそ。只我國の譽をは死して此地にとめよと。縦横に斬りまくれば。其鋒先に斃るゝ土民。瞬く内に算を亂せり。去れど新手は次第に加はり。勢始にいやまされば。味方も大概討死なし。仲磨清河其他には生残れるもの五人のみ。早や脱るゝに道なしと。覺悟極めし折しもあれ。心きたる味方の一人。何時しか舟を求め得て。上流より漕寄せつく。疾くくと



すくむるに。人々いかで猶豫すべき。飛ぶが如くに乗
移れば。船は早くも彼方の岸へ。

* * * * *

斯くて仲賢は風波の爲めに溺死せりと唐人つたへたり
ければ。李白爲に詩をつくりてこれを悼惜したりける
に。仲賢再び恙なく清河と共に唐に入り。斯くと上聞
に達せしかば。肅宗皇帝時に國亂あり玄宗位を退き。
肅宗帝位をつけるなり。仲賢を召し。仲賢を以つて左
散騎に擢んで。常に安南都護に侍せしめ。既にして光
祿大夫に至り。更に御史中丞北海郡開國公を兼ね。食

邑三千戸を賜ふ。我朝寶龜元年正月年七十にして唐に
卒す。代宗皇帝位をうくるに及びて。仲賢に贈くるに
潞州大都督を以てす。寶龜十年光仁天皇詔して曰く。
前の學生阿部朝臣仲賢在唐亡ぶ家口單乏葬祭有所闕
其れ東百絶匹白綿三百屯賜へ
と又仁明天皇の承和三年。遣唐使に命じて正二位の官
を贈らるるに至る。仲賢の光榮誠に大なりといふべし。
仲賢唐に在るもの五十餘年。恩寵常に身に餘れりとい
へども。言郷國に及べば。潜然として涙を下さざる事
なかりしといふ。且つて新羅の宿衛王子金隱居といへ
る人に托して。郷里の父に送れるの書あり。字々これ

慕郷の涙ならざるはなしと傳ふ。
 清河も終に唐に仕へ。名を河清と改め。秘書監に拜す。
 我孝謙天皇遙に常陸守を授け給へ。天平勝賢八年更に
 從三位の官を賜ふ。河清終に唐に没す齡七十三。唐帝
 潞州大都督を贈る。我朝依つて更に從二位を贈れり。
 桓武天皇の延曆中清河の舊宅を以て寺となし。齊思院
 と號し。全廿二年猶ほ詔して正二位を贈らる。勅意に
 曰く。

入唐大使贈從二位藤原朝臣河清。命を先朝に御みて
 聘を唐國に修む。既にして舳をかへさんとし津に迷
 ひて。漂蕩他郷に物故す。故贈正二位慰其靈。

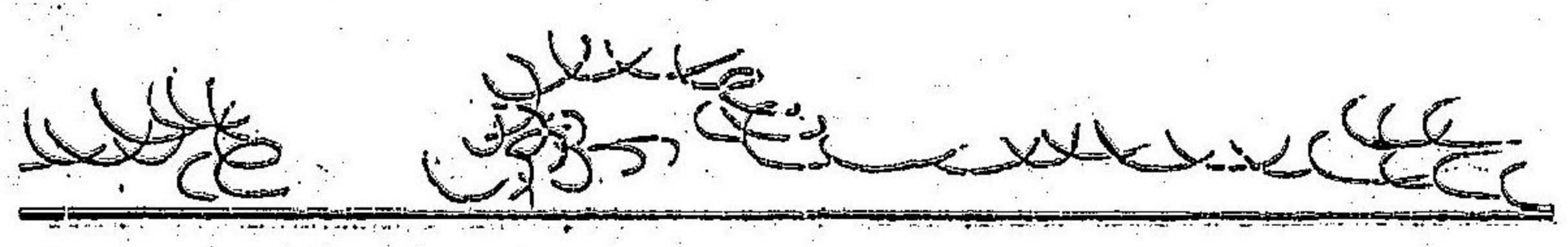
仁明天皇の承和三年又從一品を贈り。痛悼の意を表
 し給ふといふ。

名残の露

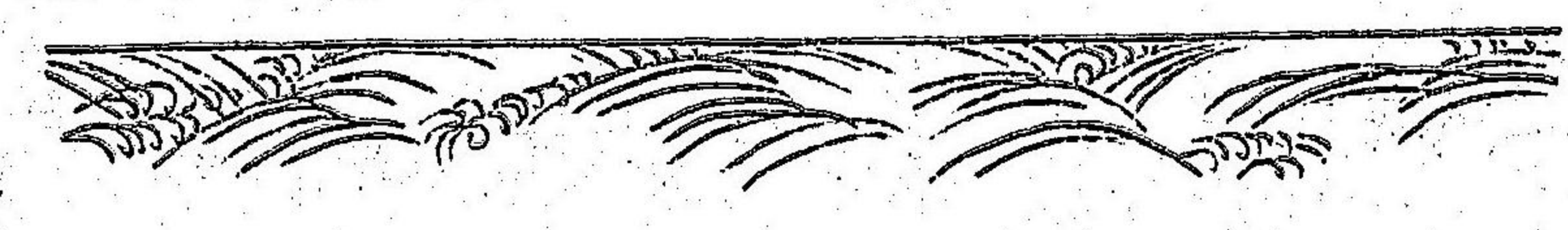
立別れいなば山の嶺
 に生ふる

まつてふ心は別るゝ時に早や萌ゆそめて。月日をかさぬ
 るにつけ命なりけりなほ打訖あるにも至るものぞとよ。

* * * * *

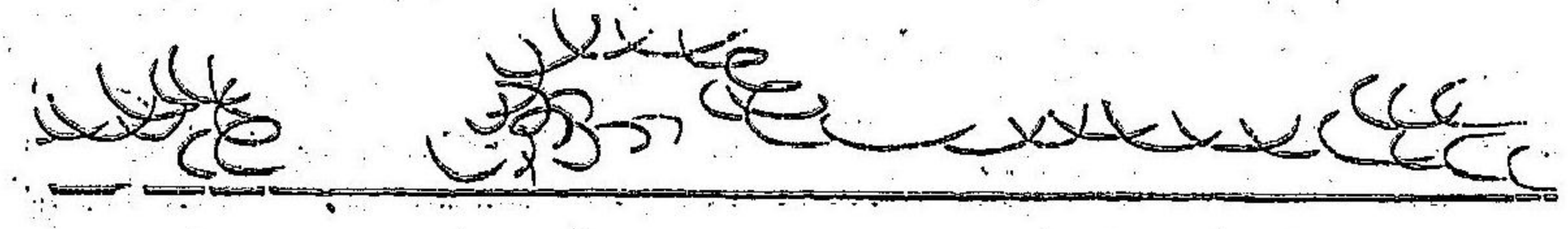


茲にいと隣なるは遣唐大使藤原清河の女が身の上なり
 けり清河の女の名をば喜娘となん呼びけり容貌さよら
 かにして心やさしく殊に和歌をよくしたりけるが喜娘
 父清河唐にれもむきてよりは唯そをなつかしみ慕ひて
 旦の雲夕の波空しく涙に袖をひたし花咲く春の日には
 父が片身の直衣を花の枝にうちかけていまうかりつる
 昔をしのび秋の夜の月圓かなる筵に琴を抱ては常々こ
 のみ給ひたる秋風樂をかなでつく今日は早や船出し給
 へけん明日は音信もあるべしやと軒の燕の子をはこく
 み雲井のかりの一連にも待ち焦れつる心には千々に思
 を碎けども父は何處にましますらん風のたよりもあら



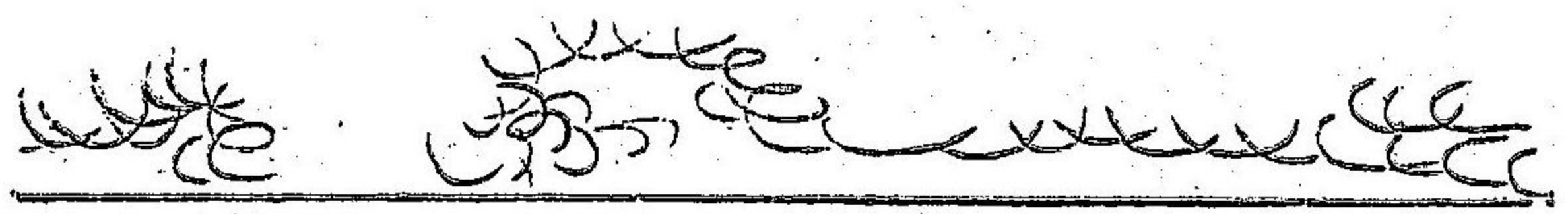
さる折しも或日一人の僕走せ来て今日なん世に珍しき
 事を聞き侍りにさそは他事ならず今度唐の帝より使來
 りて明日は都に入るべしとよさためて日頃待くらし給
 ふなる御父君のたよりもおはすべしといふ喜娘かくと
 聞きて唯ならず打喜び其夜を千代に待明しける處に果
 して朝廷の御使ありて父よりの玉章一卷をば賜へける
 母君生きて世にましまさは共に喜び給はんすらんに今
 は悲も喜びも我身一人にすることを憂けれと封をどくく
 讀下すに思は同じ父君の筆のはこびは涙にて拂へど又
 も目はくもり一字にむせび一句に泣き文の終を見てあ
 れば今は世になき父と思へ斷絶め給へかしさりとて無





情とてなうらみ給へぞ宿世の縁つたなくして命は親子
 ありながら重ねて相見る期も待ち難し月入る山の彼方
 にぞ父あるなりと思ひ給へ日出づる方に御身又ありと
 し吾もなぐさまん』と繰返してぞ書れける。

喜娘は『つれなの父上や唐人たにも渡る海をなさては渡
 し給はぬぞよし一度は風波の障ありて吹戻され御身も
 危くなり給ふともよも重ねてはさもあらじ』とうらみ歎
 きて居たりけるが今は女の身なりとも唐使かへらんそ
 の折に便船なして彼國に先づ推渡り父君が朝な夕なの
 侍も心のまくにせまほしくと一度思きためては雷一筋
 にはやられてかくと帝に請ひ奉れば帝もこれを憐み給



ひ唐使を召して旨をつたへ且つ清河を召還す御勅書を
 さへ賜りて喜娘は更に勅使たる判官大伴繼人等と船を
 共にし和田原八十島かけて漕出でける。

* * * * *

世ひらけて海を渡るべき船も疾く安けくなりもて來ぬ
 る今に至りて萬里の他郷もとなりづからの如く覺ゆる
 たに若き女の唯一人親を戀ひ夫を慕ふの餘りに遙々と
 波路を分くとし聞かばたれかそのなさけのうれしさを
 たへへせらんやまして喜娘が男やしくも唐使のかへる
 に伴ひて思立ちたる旅路こそ千古に傳ふ美談なれ。





悲しきかな憂ふべきかな親子の縁實にや實に拙なかり
けん風荒れて船は肥後なる天草の港にこそは吹もどさ
れ望も空しくなりける。

喜娘はさすが女氣の張つめし氣も亦弱り天神吾等をに
くまるるか海龍王のどがめてかかへるもゆくも風波に
さまたけられて破殼の逢ふとさへもかたし貝かひなき
浮世にあらんより今はなかく水底の藻屑となりも果
てなんと既に渚に立ちよりて身を沈めんと立騒ぐを繼
人しほしと押止めそは孝に似て孝にあらず彼の國の聖

* * * * *



人の詞にも身体髪膚そこなはざるを孝の終とは申すな
り萬里の波濤はへたつとも父君まさしく世にるませり
いかで逢ふべき期なしといはん今年花ちりて枝空しと
いへども又新なる春あつて花をば待得る樂みもあれ今
宵月暗ふして圓かなる影なしといへどもかけたる月は
ふたよび満つべし今一時のかなしみに思ひみたれて身
を海底の藻屑となし給はんづること不幸これより大な
るはなかるべし若し父君我國に折を得てかへりますと
も御身死せりとしきかはその歎斗り知る可らずと詞を
つくしていさめければかしこま心に實にもとさとりて
繼人に具せられつ共に都にかりけるを聞く人涙をしほ



名残の露完

りける。

長安の月に来てれて破かな
日とたがむ朝なくの旅心

雷 堂
菜 六

五十

明治卅年二月二十日印刷
明治卅年二月廿三日發行

定價金六錢

發行者 渡邊爲藏

東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 熊田宜遜

東京市神田區錦町三丁目二十五番地

印刷所 熊田活版所

東京市神田區錦町三丁目二十五番地



版權所有

發行所 民友社

東京市京橋區日吉町四番地

少年史譚

次編の御披露

次には中野三鷹子が阿新丸

まアどんなに面白からふ???

又其次には私が筆をふるつて新中

納言知盛を書く事といたします

一茶庵主人白

